

連載：記者有論

(記者有論) 震災遺構保存 寄付とともに思い寄せて 川端俊一

2015年6月27日05時00分



社会部・川端俊一

宮城県石巻市の北上川沿いの低地に、大川小学校の被災校舎は今も立つ。東日本大震災の直後、私がつどり着いたとき、周辺はがれきに覆われ、行方不明の子どもや先生、家族を捜すため、必死の捜索が続いていた。そこだけ空気の重さが違うように感じたのを記憶している。

がれきは取り除かれ、辺りには花々も植えられたが、訪れるたびに胸に苦しさを覚えるのは今も変わらない。80人を超える児童と教職員、多くの地域の人々の命が失われた地は、追悼に訪れる人の絶えない、「祈りの場所」になっている。

校舎を「震災遺構」として保存するか、解体するか。地域での議論がようやく始まり、今年3月、住民説明会でのアンケートの結果は「保存」が上回った。これを受け、地域有志による復興協議会は市に保存を要望したが、結論は出ていない。

「保存」を願う理由は、校舎とその一帯が祈りの場所であると同時に「学びの場所」でもあるからだ。地震から津波まで大川では50分近くあったとされる。その間、児童は校庭で待機を続け、移動の直後に津波に襲われた。校舎裏には小高い山もあり、早めに避難すれば、多くの命が救われた。不測の災害時、瞬時の決断は命運をわける。一帯の地形とともに校舎を残し、命を守ることの重さとその方策を考え続けたいという思いがある。

一方で、「解体」を求める声も切実だ。たばこのポイ捨てや無遠慮な記念写真撮影など、とりわけ震災直後の見学者の態度も影響している。校舎を見るのはつらく、行方不明の子どもがまだ中にいるかも知れない、との声も忘れてはならない。私たち報道機関の取材にも反省すべき点はある。

いずれの道を選ぶかは地域の人々の議論にゆだねるべきだと思う。ただ被災校舎を見続けてきた一人として私に保存を願う気持ちがあるのは確かだ。あの場所で考えたことは一口には言えず、県外でも保存を願う声を多く聞く。被災地の外に住む者にできることは何だろうか。

校舎と向き合って祈る気持ちを忘れず、被災地の人々と思いを共有することがまず第一のは

ずだ。それによって解体を求める人の心が少しでも和らぐことにつながるよう願う。もちろん、たゆまぬ不明者捜索の継続は欠かせない。

いつか保存が決まったときには、巨額の維持・改修費を石巻市だけに負わせるべきではない。かつて原爆ドームの保存のため、広島市の呼びかけで海外からも寄付が集まったように、「災害の国」に住む私たちが寄付金とともに思いを寄せることこそが、将来の災害で命を救う手立てにつながるはずだ。遺族、被災者が祈り、考え続ける場所には、それだけの「価値」があると信じたい。

(かわばたしゅんいち 社会部)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.